■効果の見える治水事業

徳島県南部における地震津波対策

避難時間の確保を目指した地震津波対策

徳島県 南部総合県民局（美波庁舎）
県土整備部　副部長
高橋（たかはし）　正夫（まさお）

○事業概要　徳島県南部総合県民局（美波庁舎）は、高知県に隣接する徳島県南部の３町（面積：約５万ｈａ，人口：約５万人）を所管し、太平洋に面した海部灘沿岸の約１４２ｋｍ（海岸保全区域約３５ｋｍ）を管理しております。この地域は、過去に襲来した津波の痕跡・史跡・文献等が多く残されており、また、近年では平成２２年のチリ津波や、平成２３年の東日本大震災による津波で、船舶が流されるなどの被害が発生している津波襲来地です。

徳島県では、県民の皆様の生命を守るために、「南海トラフの巨大地震」や「活断層地震」に備え「死者０（ゼロ）を目指す」ことを基本理念として、ハード・ソフト対策を推進しており、平成２５年３月２９日に、南海トラフの地震津波の影響を受ける地域では初めて県全体の「設計津波（L1津波）の水位」を公表しました。

美波庁舎管内においては、『設計津波の水位』が高く、施設整備に時間を要するため、段階的な対策を行う方針を打ち立て、まずは津波避難所までの避難時間を考慮した『避難時間の確保』のための整備を行うこととしております。

今後は、迫り来る「南海トラフの巨大地震」を迎え撃つため、早期に効果発現できる段階的な堤防整備や、「率先避難の啓発」などのソフト対策を推進し、「南海トラフの巨大地震」による「死者０（ゼロ）」の実現を目指し取り組んでいきたいと考えております。

宍喰川河川堤防耐震補強工事
平成２３年度工事着手

宍喰海岸堤防耐震補強工事
平成２２年度完了

我町の地震・津波対策

海陽町長　五軒家（ごけんや）　憲次（けんじ）

毎年何回となく自然の脅威に神経をとがらせるも、自然の威力の前には、人の無力さ、人智の限界を思い知らされている。

平成７年１月 17 日阪神大震災では安全神話が消え、平成 23 年３月 11 日の東日本大震災は、地震、津波、政治の限界、曖昧との議論が百出した。地震発生の日時、場所、規模の三要素唯今予測不可能。茶の間で天気予報と同様に地震予報の聞けること何時か。その道は開かれるのか、日暮れて道遠し・・・

我町、特に浅川地区(V 字型港湾内の集落)は白鳳地震(684 年.M8.4)から８回津波に襲われた歴史.記録があり、昭和 21 年 12 月 21 日未明の南海地震津波では 85 名が亡くなり、集落は全滅、県下一の被災地であった。

自分は当時８歳、小学校２年生、修羅場の映像だけは子供の脳裏に焼き付いた。

昭和５９年村上仁士先生(現徳島大学名誉教授)との出会いが津波対策を町の大黒柱にすべき決定打となった。先生のご指導により、一歩一歩、ハード・ソフト両面から進め、唯今も進行形である。一期一会の大切さをしみじみとかみしめている。

昭和南海地震浅川村１

昭和南海地震浅川村２

30 有余年取組んだ主課題、ソフト面は避難訓練等毎年積み重ねている。ハード面は平成 10 年に完成したまぜのおか、平常時は、親子.グループの絆の場、車の宿屋であるが、[事]が起これば避難場所に(H=25m 前後高台.体育館.温水プール. コテージ 12 戸.テント.毛布完備等)

平成15年には町立病院の高台移転(H=8.4m)　平成18年には命の堤防が完成し(次の南海地震津波　M8.0 前後に耐える構造)　そして、平成 22 年に我町の防災の司令塔　県立南部防災館が設置された。この完成によりハード面の防災対応の第一ラウンドは曲がりながらも、浅川地区は節目をクリアーしたと納得したが、翌年３月 11 日三陸沖の地震津波により再スタートとなる。

浅川全景

平行して平成 22 年には、国により我町沖合に波浪計(GPS)設置。平成 24 年度より地震津波観測監視システムの体系化がされつつある。一方陸上道路は海岸線を走る国道 55 号一本、迂回路はなく、荒天時は通行止め。本年悲願達成、第二国道の調査区間に決定された。命の道の第一歩を町民挙げて喜び、引き続き事業化を切望している。しかしながら他力本願に全て依存すべきでない、我町でできるものはやるべきとの基本姿勢から、第二国道はトンネル主体、残土処分場を確保し、新道完成時には我町の公共防災施設等を設置すべき構想をもって、住民の命を守る基金条例 10 億円を６月議会に設定した。

三位一体、三本の矢の流行言を借りれば三本の命の堤である。海(津波)、陸(道路)、山(津波)　我町住家は山を背に散在しており、1892 年(明治 25 年)崩壊により 47 名犠牲者を出した苦い経験がある。三本の堤に向けて奮闘する。

[三つ子の魂百まで]子供に防災教育の徹底を図る。

住民は速く高台に逃げ、公は迅速、的確なる情報周知　これが生命線である。やりすぎた[災害対策はない]　[備えてなを憂う]が自然災害に対する行政の基本、臥薪嘗胆を肝に銘じている。

昭和南海地震浅川村３